

第7章

性的搾取や性暴力被害にあった 女子中・高生の伴走支援

仁藤 夢乃

私が代表を務める女子高生サポートセンター一般社団法人Colabo（以下、Colabo）では、「すべての少女に衣食住と関係性を。困っている少女が暴力や搾取に行き着かなくてよい社会に」を合言葉に、中・高生世代を中心とする女子を支える活動を行っている。

夜の街で家に帰れずにいる少女たちへの声掛けや、SNSなどから寄せられる相談に乗るほか、児童相談所や警察、学校、病院などへの同行支援、虐待や性暴力被害などを背景に家に帰れない少女たちが一時的に泊まれるシェルターの運営、食事、風呂、衣類や宿泊場所などの提供を行っている。さらなる支援が必要な場合には、中長期シェルターで暮らしを支え、同じような境遇を生き抜いた女子たちによる自助グループの運営や就労支援も行っている。

2011年の団体設立から、年間100名ほどの少年少女と出会ってきたが、今年度は相談が増え、半期で既に200名以上の少女たちと関わっている。

1 「難民高校生」だった高校時代

10数年前、私も中・高生だった頃、父親のDVや母親の鬱病、両親の離婚などから家が安心して過ごしたり眠ったりできる場所ではなく、街を徘徊する生活を送った。家族と顔を合わせれば暴言や暴力が飛び交うため、キッチ

ンやトイレ、風呂、洗面所などの共有スペースを使うのに気をつかった。家族が包丁を持ち出して、殺すか殺されるかしかなと思った日もあった。そのため、親が仕事に出ている日中に家で仮眠し、夕方から街に出る生活をしていて。ファストフードや漫画喫茶、居酒屋、カラオケの他、お金がない時にはビルの屋上に段ボールを敷いて一夜を明かしたこともある。いつも体がだるく、月経が半年止まったこともある。

街では、自分と同じような苦しみを抱える中・高生と出会った。当時、「ネットカフェ難民」が社会問題化し、ネットカフェで寝泊まりする30代男性がテレビでよく取り上げられているのを見ながら、「うちらも難民じゃね」「ホームレスだよ」とつぶやいていた。大人だけでなく、中・高生にも家に帰れず生活をしている人がいるのに、と思っていたことから、当時の経験を『難民高校生』（筑摩書房）に書いた。自分と似た状況にある子ども達の問題が「不良少年」「非行少女」として、子どもの問題、子どもが悪さをしているという文脈でばかり語られるたびに「私たちにも事情があって、街に出ているのに」「本当は家にいたいのに」と思っていた。

家で安心して眠れない日が続くと、学校では、遅刻や授業中の居眠りが増えて、教員から注意されるようになった。授業についていけず、成績もどんどん悪くなり「問題児」扱いされるようになった。

繁華街で少年補導が厳しくなる中、23時を過ぎる前に繁華街から移動し、住宅街の公園やベンチで隠れるようにして朝を待った。「死にたい」と願い、マンションから飛び降りようとしたり、自殺の方法をネットで検索したこともある。朝帰りする電車の中では、同年代の高校生が部活の朝練に向かうのを眺めながら、自分を情けなく感じた。高2の夏、高校を中退した。

親を悪く言いたくない、親を悪く思われたくない、自分が話したことがばれたら大変なことになるという思いから、家で起きていることは誰にも話さなかった。学校では家族は支えあい、親には感謝をするものと教えられ、親にも病気や障害があったり、経済的な事情があったりすることや、親も孤立していることをわかっていたので、余計に声を上げられなかった。

2 支援につながる前に、危険に取り込まれる子どもたち

今でも、そうした少年少女に路上やネット上で声を掛けるのは、手を差し伸べる大人ではないのが現状だ。少女の場合は、買春者や、JKビジネスや違法の風俗店や児童買春の斡旋業者。少年の場合は振り込め詐欺の受け子や、違法の建築作業や除染作業に斡旋する業者などが声掛けをしています。少女を違法風俗店に斡旋するためのスカウトとして少年が使われることもある。

渋谷や新宿などの繁華街では、毎晩100人ほどのスカウトが街に立ち、少年少女に声を掛けている。こうした危険に取り込まれる子どもが後を絶たないのは、困っている子どもたちが支援につながる前に、危険に取り込まれているからだ。

ある中学生は、父親に殴られ裸足で家を飛び出した真冬の深夜2時頃、小さな街の階段に座っていると、男に声を掛けられた。事情を話すとコンビニでおにぎりを買ってくれ、手を握られて「怖くて抵抗できなかった」と言う。男の家に着き、おにぎりを食べると「歯磨きかお風呂、どっちかやる?」と聞かれ、断ったが強姦された。彼女は「声を掛けて来るのは、そういう人だけだった。寝たくてもどこで寝たらいいかわからないし、自分に関心を寄せてくれるのも頼れるのもその人たちだけだった」と話した。

父親からの性的虐待や兄の友人から性的暴力を受けて妊娠した少女が、妊婦専門の風俗店で売春して働き、出産後も「母乳」を売りにして性売買に縛られるしかないと思っていたことや、障害のある少女が狙われて性的搾取されているケースもあった。困っている子どもが支援につながる前に、危険に取り込まれている。

スカウト組織や買春者は、少年少女に必要な「衣食住+関係性」を、支援より先に与えることを手段として近づく。話を聞き、理解を示し、帰るところがないのなら「寮」を、補導から逃れるための「宿泊場所」を提供し、時に食事を与え、学習支援をしている店もある。彼らは少女たちを「担い手」

として捉え、仕事を与えて取り込む。

女子高生の性を売り物にする「JKビジネス」の経営者たちは、組織的に巧みに少女を勧誘し、ブログや、ツイッター、ラインなどのSNSに求人を掲載。店はツイッターアカウントを開設し、女子高生のアカウントをフォローして関心を引いたり、店の少女のSNSで求人情報を拡散させたりし、少女を使ってスタッフ集めもしている。私はこれまで、JKビジネス店で働いた少女160名以上と関わっているが、その全員が客引き中、買春や性交渉を持ちかけられたという。

「観光案内のアルバイト」という求人を見て面接に行ったら「男性とデートをする仕事だ」と言われ、学生証のコピーを取られてしまったので断れずに当日働くと、カラオケや漫画喫茶で客から性行為を強要された少女。「JKカフェ」でのアルバイトだと考えて応募すると、仕事内容を知らされないままマッサージ店を名乗る「JKリフレ」に派遣され、性行為を強要された少女。「スカウト」を名乗る人物に声を掛けられ、「仕事を紹介する」と言われたり、「大手芸能事務所が運営するカフェ」や「撮影スタジオ」であるとだまされたりし、ポルノ動画を撮影された被害もある。被害にあった子どもの多くは、親や学校、友人への発覚を恐れ、誰にも相談できずにいる。

『女子高生の裏社会』（光文社新書）に詳しくまとめたが、JKビジネスで働く少女たちは、①貧困層、②不安定層、③生活安定層の3つの層に分けられる。①経済的困窮家庭の少女や、②家庭や学校に何らかの困難を抱えている少女のみならず、③両親との仲も学校での成績もよく、将来の夢もあって受験を控えているような「普通の」女子高生が、リフレやお散歩の現場に入り込んでいる。

JKビジネスが一般化していくと、貧困状態にあったり、コミュニケーションが苦手だったり、自信がない、障害を持っている等、困窮度が高い少女は生活に必要な稼ぎを得られなくなる。その結果、より劣悪な環境で性売買をさせる業者に囲われるなどして、性奴隷のように働かされた少女とも出会っている。経済的に困窮し、「生理用品が買えない、今日食べる物が無い」と

話す少女、「給食費や修学旅行費を支払うため」に始めたと話中・高生もいる。父親からの性的虐待を背景に、「家にいてお父さんにやられるよりまし」と、宿泊場所を求めてさまよっていた少女もいる。

子どもを利用しようとする大人たちは、どこに困っている子どもがいるのか、どうしたら子どもたちから信頼を得られるかを知っている。子どもたちの文化を学び、生活を否定しない形で、むしろ彼らの生活に入り込むようにして、理解者であるかのように近づいている。

3 児童買春が「援助交際」と語られる日本社会

売春する中・高生について、どんなイメージを持っていますか？

2015年夏、ある大学の授業でそう投げかけると、学生たちからこんな言葉が返ってきた。

- 遊ぶお金がほしいから
 - 孤独でさみしい人がやること
 - 愛情を求めて
 - 快樂のため
 - 優越感に浸るため
 - 友達に誘われて
 - 派手でギャルっぽい子がやっている
 - その場限りの考えで
 - そんな友達はいなかったから、わからない
 - 自分は誘われたけど断ったから、やりたい人がやりたくてやっていると思う
 - どうしてそこまでやれるのか、理解できない
- その場にいた当事者のAは、言った。

「そんなもんだよ。世の中の理解なんて。もう、そんなことでは傷つけなくなった」。

日本では、児童買春について「援助交際」という言葉で、「遊ぶ金欲しさに」「気軽に足を踏み入れる少女たち」という文脈で、大人から少女への援助であるかのように語られ続けてきた。そこにあるのは「援助」や「交際」ではなく、暴力と支配の関係であり、買う側の存在や性暴力、子どもの傷つきや、トラウマについて目を向ける人は少ない。

児童買春を通して、どんな暴力が子どもに振るわれているかもあまり知られていない。そこで起きるのは、対等なパートナーシップ関係の中で行われるそれとは違い、性暴力そのものだ。性器に異物を入れられたり、体に「メス豚」「汚女」などとカッターで切り刻まれたり、髪を引っ張られたり、殴られたり、蹴られたり、吐かされたり、AVを見せられて真似をさせられたりしたという中・高生と出会っている。幼少期や小学生の時の被害もある。もちろん、避妊する加害者などほばいない。被害にあった子どもたちは、さまざまな被害の影響を抱えて生きていくことになる。

そんな中、日本では、「売春」は売る側の個人的な問題として語られ、その背景に目を向けたり、「買う」側の問題に目を向けられてこなかった。売春防止法でも、売春する女性を社会の風俗を乱すものとして取締り、男性は売春を持ち掛けられる「相手方」として、受動的な存在に位置づけられている。5条の勧誘罪は、女性にしか適用されない法律になっており、男性が買春を持ち掛けた罪を問われることはない。

2015年夏には16歳の少女がSNSを通して売春を持ち掛けたとして逮捕された。少女は高校を中退し、家に帰らず半年間居所不明で、任意の事情聴取ができないことから逮捕に踏み切ったと警察は発表した。この事件について、ある記者から「なぜ少女が軽い気持ちで売春するのか。どうしたら止められるのか」と聞かれたが、私は彼女には、家に帰れない、帰りたくない事情があったのではないかと思った。多くのメディアは、「少女は遊ぶ金欲しさに売春し、得た金を洋服や映画代にしていた」と報じた。私は半年間生活するには衣類や娯楽も必要だと思った。食料や宿を確保したり、マンガ喫茶でシャワーを浴びたりしたかもしれない。私は「売春で得た金を食費や生活費、学

費、給食費や修学旅行費にしていた」という中・高生と日々出会っているが、そのような報道はほとんど目にしない。

4 お金を介することで、暴力を正当化する大人

2016年、Colaboとつながる14～26歳の24名の児童買春に関わった経験を持つ女子たちと、それぞれが「買われる」に至るまでの背景や体験を伝える企画を考えた。「売ったというより、買われたという感覚だった」という少女の言葉から「私たちは『買われた』展」と名付けた。「売春＝気軽に、遊ぶ金欲しさ」という世間のイメージに一石を投じるとともに、そこにある暴力や、その影響を受けて生きる当事者の姿を伝えることで、そこに至るまでの背景に目を向け、買う側の行為や大人の責任に気づく人を増やすことを目的にした。

虐待から逃れるため、家を出て座り込んだ公園のベンチやうつむいて歩いた繁華街の道、リストカットのあとが残る腕、成人するまで生き延びることができたことを伝える写真、コンビニの廃棄物を1人で食べ続ける日常を記録したノートや障害を理由に差別された経験、性暴力やいじめなどの被害を学校や児童相談所や役所、警察、福祉施設などに相談した際に受けた不適切な対応や体験について伝えるパネルを作成し、以来、各地でこの企画展を開催している。

開催がメディアで報じられてから、ネットを中心に「売っていたから買ったんだ」「被害者ぶるな」「買ってもらえるだけありがたいと思え」などの誹謗中傷にさらされた。一方で、会場には初めの10日間で約3千人の来場があり、企画展の来場者アンケートでは、売春せざるを得ない状況を生き抜いてきたという女性たちから「私も同じ」という声が300件ほど届いた。児童買春について、1990年代から「少女たちがブランドものの欲しさや、自分のアイデンティティのために性を売り出した」などと一部の社会学者やフェミニストも語ってきたが、それにより、一番苦しい所にいた子どもや女性たち

の存在がかき消されてきたのだと実感した。企画展を通して虐待や性被害に
あっていることを打ち明けてくれたことから、保護された中・高生もいる。

5 貧困で性を売らざるを得ない女子高生がいることで 「一般」の女性が性犯罪から守られるか

こうした中・高生を取り巻く状況について講演したとき、ある男子大学生
から「性暴力で苦しんでいる人がいることは良くないと思いますが、性欲
は三大欲求と言われ、本能なので仕方ないですね」と言われたことがある。
性欲をどう満たすかということと、性暴力を振るうことは別であること。性
暴力は性欲ではなく支配欲から行われること。例え相手が恋人であったとし
ても、性欲が抑えられないからといって、お金で性を買ったり、支配するこ
とで自分の性欲を満たすことは「権利」ではなく「暴力」にならないか、「そ
こに対等な関係性があると思うか」と話すと、「当たり前 to 女性を買える状
況があるので、そんなこと考えたこともなかったです」と彼は言った。

自分の性欲にどう向き合い、どう満たし、どうコントロールするのかとい
う性的な自立について教えてくれる人も、考える機会もなく、暴力的、支配
的な文脈でつくられた動画が小・中学生でも簡単にネットで見られる状況
がある中で、「性欲をコントロールできない」と思い込まされている若者は少
なくないと感じている。

ある進学校では、女子高生から「援助交際に関わる人がいることで私たち
のような“一般”の女子高生や女性が性的対象とならずに済み、性暴力の抑
制になっています。性欲はコントロールが難しい。性欲を否定することは人
権侵害につながります。貧困などでお金が欲しい人と性欲を抑えられない男
性との間でウィンウィンの関係があり、国の利益のためにも売春を合法化す
べきです」と言われたことがある。

彼女は性暴力や性犯罪がなくならないことを前提にし、風俗が性暴力の抑
止力になるという言説を信じていた。女性を二分化する考え方や、「貧困な

どでそうせざるを得ない女性」が「一般」の女子高生を性暴力から守る防波堤になるという考えが何を生んだのか過去の歴史を振り返ると恐ろしくなると同時に、「国の利益」という視点で性売買について考える女子高生が育っていることに危機感を覚えている。彼女は、周りの大人やネットの情報から影響を受けていて、自分が差別する側に立っていることや、自分がそうならなければ他の女性の権利が侵害されてもいいという考え方をしているということに無自覚だった。

「誰かの犠牲の上に自分の幸せを築くことはできますか」と問いかけると、彼女は「犠牲ではなく、自分の意思で来た人もいるはずだ。やりたくてやっている人もいるはずだ」と言う。では、本人が、積極的な選択だから、自分の意思だからと言えば、性暴力を誰かが引き受けるようなことがあっていいか。「自由意志の奴隷」はありなのか。と、私は問いかけた。「売る・売らない」論で語ることが、これまでも問題の本質を見えなくさせてきた。

6 「子どもの抵抗感の薄さ」が問題か

2017年、警視庁が公表した「JKビジネス」で勤務経験がある少女たちへのアンケート結果では、家庭や学校に不満がない「普通の女の子」たちの多くが、金銭目的でJKビジネスに関わっていた実態が明らかになった。2月17日『朝日新聞』がこれについて「JKビジネス 安易な動機 金銭目的・性行為 抵抗感薄く」というタイトルで記事にした。警視庁によると、昨年児童福祉法違反などで摘発された都内のJKビジネス2店舗に勤務した15～17歳の少女42人のうち、約半数が勤務を通じて、客との性行為の経験が「ある」と回答。見知らぬ客と性行為をすることについて「場合によってはやむを得ない」と回答した人は28%にのぼった。朝日新聞はこの結果を「抵抗感の希薄さが浮き彫りになった」とまとめたが印象操作だと思った。また、記事では「家庭での生活に満足していると答えた人は全体の66%を占め、学校生活に満足している、とした人も全体の33%いた」とあったが、そうし

た子どもたちまでもが「安易な動機」で足を踏み入れてしまうほど、敷居を下げる店側の手口や学校での教育がないことが問題であるはずだ。

この記事について、Colaboのシェルターにいた女子高生たちがこう話した。

「警察発表鵜呑みにしてどうすんの。『性行為やむを得ぬ』なんて高校生が言うわけじゃない。そんな言葉で勝手に語らないでほしい。怖くて体固まったり、断れなかったり抵抗できなかった理由とか背景があるかもしれないし、うちはそうだった」

「もし補導されて、やった理由を聞かれたら、『お金が欲しかったから』って私だって言う。何に使ったのか聞かれら、『遊び』って言う。家が生活保護で大変でーとか、親の彼氏に暴力振るわれてお金取られますとか、そんな話できないし、生活に満足してるかと聞かれたら『幸せです』って言うし、本当のことなんて言ったらどうなるかわからないから言わない」

「場合によってはやむを得ぬ」の「場合」には、断れなかったり抵抗できなかったりした場合、強制された場合、お金の困っていた場合、他の仕事への就労が難しい場合、福祉や教育からこぼれ落ちて行き場がなかった場合、他に頼れる人がいなかった場合など、いろいろな「場合」が含まれている。記事のように、子どもの「抵抗感のなさ」を問題や原因にすることは本質を見えなくさせる。

目を向けるべきは、「やむを得ぬ」と言わせてしまう状況があることであり、少女たちがそこで働くまでの背景や働き続ける理由、困難を抱えていないように見える子たちまでも気軽な気持ちで取り込む「手口」や「組織」があることだ。そもそも、JKビジネスは「売りたい大人」と「買いたい人」の需要と供給で成り立ち、そこに「子どもが商品化」されていること。買う側の存在やその暴力性。加害者には大学生などの若者も多いこと。被害にあった子どものトラウマとケア。危険や身の守り方や、困っている友達がいたらどうしたらいいか教えたり、加害者にならないための教育やケアがないことなどが問題である。

また、JKビジネスが成り立ち、「普通」の少女も働く大前提として、女子高生に性的な価値や高い価値を見出すような社会があること。女子小・中学生の性ですら「萌え文化」などといって消費されていること。子どもの性を商品化し、それを買うことが当たり前のようになっている社会、お金を介することで子どもへの暴力を正当化しようとする大人がたくさんいることなどを、「大人の問題」として本気で考えないといけな。少女の気軽さ以上に、少女を買う大人の気軽さや抵抗感の薄さにこそ注目すべきであり、「女子高生」ということに性的な価値を見出すようなものが「ビジネス」として認められてしまう社会そのものを見直す必要がある。

7 「やっちゃダメ」より「買っちゃダメ」

2017年7月には、JKビジネスを禁止する都条例「特定異性接客営業等の規制に関する条例」が施行された。しかし、そこでも買う側への規制や少女へのケア、被害にあった時にどうすればよいかや加害者にならないための教育についての視点は欠けており、営業を届出制にし、少女の補導に力を入れ、従業員名簿を警察がチェックできるようにするという女性に対する取締りのようなことばかり行われ、18歳未満の雇用を禁止することによる事実上の合法化のようになっている。

さらに、警視庁は「STOP !! リアルJK」というポスターを制作した。JKビジネスの問題の本質は、「本物の女子高生」が被害にあっているかどうかではない。国連や米国国務省による人身取引に関する報告書が「日本における人身取引」と指摘されるように、貧困や虐待などで孤立したりだまされたりした少女たちが、手を差し伸べてくれるふりをした大人によって取り込まれ、被害にあう搾取や暴力の構造があることや、女子高生を「JK」という記号で性的に価値の高いものとしてブランド化し、商品化し消費する社会そのものにあることに目を向けなければ現状は変わらない。

また、東京都が公開した「JKビジネス危険啓発サイト」（現在は閲覧する

ことができなくなっている) には、女子高生に人気の女性モデルを起用し、「JKビジネスはハマると危険なコワイ沼」「ほんとにヤバイよ。そのバイト」「絶対やっちゃダメ」などを書いてあった。女子高生を売り買いする大人に目を向け「売っちゃダメ」「買っちゃダメ」と言うべきではないか。

さらに、このサイトでは「お金と引き換えに失うものは大きいよ」「モノ扱いされて嫌じゃないの?」「断らないと、友達減るより怖いことに巻き込まれるよ」「本当にヤバかった子は言えないんだよ」などと脅し、子どもに責任を押し付けていた。一方で、少女の性をモノ扱いし、商品化を容認してきた大人の責任については一切書かれていなかった。

お金が必要だったり、友達に誘われて断れない状況で始める子どもがいることを知っているなら、そういう時にどうしたらよいかを教えるべきであり、性被害にあった子どもたちが、そのことを誰にも話せずにいることを知っているなら、どうしてこんな言い方をしたのだろう。これでは、「足を踏み入れたあなたが悪い」と言うようであり、被害にあっている人はますます声を上げられなくなる。性被害の被害者の多くは「抵抗できなかった」と言う。「もし被害にあっても、あなたは悪くないよ。ちゃんと大人が守るから」と伝え、支えていくのが大人の責任ではないか。

いつの時代にも支配の関係性の中に性暴力が起きている。自分の利益のために誰かを支配・搾取・利用するようなことを権利として主張する人の声が大きくなっていると感じているが、「暴力」を「権利」として振りかざそうとする人たちの声にかき消されないように、声を上げ続けたい。

8 保護を恐れる子どもたち

危険につながる青少年が後を絶たない一方で、困難を抱えた青少年が公的支援を受けるには高いハードルがある。街で声を掛けた少女に「保護じゃないよね?」と、怯えた様子で言われたことが何度かある。子どもを守るはずの機関で不適切な対応をされたり、大人に傷つけられたりした経験から、子

どもたちにとって「保護」が恐れるものとなっていることがあるのだ。

子どもを保護する体制が、困難を抱える青少年の実態と合っていないことも日々感じている。例えば、児童相談所の開所時間は多くが平日の日中のみで、平日8時半頃～17時頃までしか管轄児相での対応はされない。午後遅い時間に子どもが保護を求めても即日保護はしてもらえないことがほとんどで、放課後相談しようとする対応してもらえる時間に合わない。児童相談所が夜間・休日を問わず、いつ駆け込んでも助けてくれる機関になるべきだ。

保護のニーズが高まる夜間や土日祝日、年末年始に駆け込める公的機関は警察だけだが、警察も子どもを保護するための機関ではなく、不適切な対応をされることは少なくない。公的機関で唯一、積極的に困っている子どもを発見し、繋がる活動をしているのも警察だが、それは「補導」という形になり、補導された子どもは生活態度を注意されたり、親や学校に連絡されたりし、家に連れ戻される。補導回数が重なると、犯罪を起こす可能性が高い「虞犯少年」として鑑別所や少年院に送られることもある。だから私は中・高時代、「警察は見たら逃げるものだ」と思っていた。

児童相談所でも、性売買にかかわる子どもは「保護」が必要なケースとしてではなく、「非行」ケースとして扱われることがあるが、そうした子どもたちを「困った子」ではなく、「困っている子」として捉え、家庭など背景への介入や福祉、医療、教育的なケアに子どもをつなげることが必要だ。

9 ハイティーンの子どもたちに適切に対応ができる体制や専門性が不足している

虐待を受けた子どもは様々なトラウマを抱えており、その影響から身を守るための嘘をついたり、甘えたり、試したり、暴力的、反抗的、無関心な態度をとったりすることがある。対応には、知識と経験が必要だが、児童相談所には、事務職として採用された公務員が児童福祉司として働いているなど、トラウマへの理解や、ケアの視点を持って関わるための専門性が身について

いないことがある。また、人員不足で職員に余裕がなく、子どもや他機関支援者との関係性づくりに時間をかけることが難しい。専門性のある人を児童福祉司として採用し、専門性や知識を重ねながら長く勤務し続けられる仕組みや1つひとつのケースに丁寧に対応し、学校や医療、民間支援団体などとの連携ができる時間的、精神的な余裕を確保することが必要だ。乳幼児と中・高生では対応の仕方や必要なスキルも違うため、10代の子どもたちに対応する専門チームをつくるなどの体制を整えるべきだ。

また、児童福祉司は子どもだけでなく、家庭を支援するために親にも関わる。しかし、子どもと親の両方に同じ担当者が話を聞き、関わるため、児童福祉司と親の対立が生まれやすく、子どもからの信頼も得にくい体制となっている。客観的な判断のためにも、親子に関わる担当者を分けるべきであり、「子どもの話」を子どもの気持ちに寄り添って聞けたり、親を支えられたりする民間支援者などとの役割分担、連携も必要だ。

10 一時保護所は子どもにとって、安心安全な場所であるか

児童相談所に保護されると、多くの場合、まずは一時保護所に入所し、その間に家庭の状況の調査や子どもの生活場所を探すことになる。一時保護の期間は2週間から2ヵ月程度が基本となっているが、次の受入先が見つからないことなどから、私は最長10ヵ月以上入所していた少女を知っている。彼女は、何ヵ月も学校に通わせてもらえなかった。

一時保護期間中は、授業だけでなく、部活の試合やテスト、文化祭や体育祭、卒業式などの学校行事などにも参加できないことがほとんどだ。そのため、子どもが保護を拒み、虐待の事実はなかったと嘘の「撤回」をすることもある。

また、一時保護期間中、外部との連絡を絶たなければならず、友人や部活の先輩、アルバイト先などに「今から保護されるからしばらく連絡ができません」と連絡することも許されないままに保護され、友人関係が壊れてしま

うこともある。外部との接触が絶たれ、精神的に追い詰められる子どもたちもいる。多くの場合、教員や民間支援者、弁護士などとの連絡や面会も許されず、一時保護所内で不安を感じたり、不当な扱いを受けたときにも子どもが誰かに相談したり、声を上げることができない状況になっている。

学校への登校については、せめて、身を隠す必要のない子どもは、登校や外部との連絡ができるようになるべきだ。一時保護所の中にも、状況に応じて登校や教員、支援者などとの面会を許可している施設もある。そうした施設を参考に、体制の見直しが必要だ。

一時保護所の中では、不可解な禁止事項やルールが存在していることもある。例えば、私語禁止、鉛筆回し禁止、髪の毛の黒染め強要、お絵かきなどで1日に使える紙の枚数が1人1枚などと決まっており紙に番号が書かれている、貸し出される下着や衣類に番号が書かれている、自傷行為の痕を包帯でぐるぐる巻きにして隠させる、トイレに行くのも許可制で職員がトイレの前まで付いてくる、歯磨き粉を自分で付けてはいけず職員がつける、その他兄弟姉妹であっても会話ができない、保護所内でも一切会わせてもらえないなど。

入所時の荷物検査も厳しく、学校から配布されたプリントやテスト、友人からもらった手紙などプライバシーにかかわるものまで1枚ずつ枚数を確認されたり、脱いだ下着を含む荷物を預かり品の記録として写真撮影されたりしたことが苦痛だったと話す高校生もいる。入所中の衣類について「親が持ってきてくれない中・高生は、みんな上下黒のスウェットを着させられ、刑務所のようなだった」「ピアスの穴がふさがらないように透明のプラスチック製のピアスをつけたかったが許されず、穴がふさがってしまった」という人もいる。居室スペースに行くまでに何重もの鍵つきの扉を進まなければならず、脱走できないようにと窓も開かず、外の空気が吸えない環境の一時保護所もあるとある少女から聞いた。

ルールに違反した罰として、子どもに体育館を100周させたり、「態度や目つきが悪い」などと職員が怒鳴ったり、虐待の影響で男性職員に怯えて面

談時に黙り込んでいた少女に「大人との上手な付き合い方」をテーマにした課題図書を読ませて反省文を書かせたり、学習機の両側にパーテーションや卓球台をつい立てにして5時間漢字の書き取りをさせたり、学習段階に合わない計算ドリルをひたすら解かせるなどを「内省」の名目で行っている一時保護所もある。

「自分が悪いことをしたからここに來たわけじゃない。親が暴力をふるったから來たのに囚人になったみたい」「刑務所みたいな場所だった」「虐待があっても家にいたほうがましだと思って、家に帰りたいと言った」「もう二度と行きたくない」と話す子どもたちと出会っている。そうした子どもの気持ちを知った親や児童養護施設の職員が「いうことを聞かないと、また保護所に入れる」と脅し文句として使うこともある。

このように、今の子どもの保護の在り方は、子どもの学ぶ権利や自由を奪うようなものになっている。現在、少年院などでも施設見学ができるが、一時保護所の特に居住スペースは弁護士や支援者などでも多くの場合見学させてもらえず、中で起きていることは、子どもたちから聞く声でしかわからない。先に挙げたような現状や、各保護所ごとのルール（制度化されているものだけでなく、明文化されていないが暗黙の了解的に「私語禁止」などのルールになってしまっているものを含めて）を調査し、見直すことが必要だ。

年齢や性別（性的マイノリティの子どもへの配慮も含む）に応じた対応や必要に応じた個室対応も十分ではなく、一時保護所のスペース不足の問題もある。より家庭的な環境で保護されるため、一時保護所ではなく、児童養護施設を含む開放施設や里親を含む民間人への一時保護委託を積極的に行ってほしい。しかし、児童養護施設のキャパシティも不足しているため、既存の施設ではない民間支援者などを一時保護委託先として認めるなどの運用が必要だ。一時保護が、子どもが「脱走したい」と思わないで済むような、「ここに来てよかった」と思えるような、場所で行えるようになってほしい。

11 出合いに行かなければ、出会えない子どもたち

私たちが日々関わっている中・高生について「そういう子どもたちは相談窓口に来ない」という声を支援の現場でよく聞くが、家庭や学校などで傷ついてきた子どもたちが、自ら相談機関を調べて面談の予約を取り、交通費と時間をかけて相談に行くというのは現実的ではない。あきらめ感が強かったり、自暴自棄になったりしている子どもたちの多くは、「大人に諦められた」と感じる経験をしていたり、自己責任論の中で「自分が悪い」と思い込み、声を上げられずにいたりすることもある。

私たちはこれまで、夜の街で家に帰らずにいる青少年を「発見し、出合い、つながること」を目的に、街に出て声を掛けるアウトリーチ活動を行ってきた。中学生の時、声を掛けられたのがきっかけで、その2年後、虐待で家に帰れなくなった時に生活を変えたいと連絡をくれた人もいた。街で出会ったことがきっかけで、ColaboのSNSでの発信を見ながら連絡をするか迷い、1年以上たってから勇気を出して連絡をくれた人もいる。

その時すぐに支援につながらなくても、「こういう人がいるんだ」と知ってもらい、支援者側から顔を見せることが必要だ。そして、支援を受けることを強要するのではなく、本人が求めるタイミングで、何が必要か、どうしたらいいか、一緒に考えていける大人が増えてほしいと思っている。

そこで、2018年10月から、韓国における先行的な実践を参考に、繁華街に停車させたバスを拠点にしたアウトリーチを開始する。韓国ではソウル市だけで行政機関を含む7団体がバスを使ったアウトリーチ、食事提供などを行っているという。

私たちは、渋谷区、新宿区と連携し、繁華街にキャンピングカー仕様のマイクロバスを停車させ、バスの周りにテントを置き、イスやテーブルを並べて食事をとったり話ができるような場をつくる。そこを拠点に、スタッフとボランティアがチームに別れて少女たちに声をかけ、団体の活動や、バスで

受けられる支援を案内する。カイロやテレホンカード、食料などの物品を提供したり、相談窓口の紹介が載ったカードやグッズを配布するなどする。

バスでは、食事や物品提供を行い、必要に応じて相談や行政・病院などへの同行支援、緊急一時保護を行う。

これまでは、街で声を掛け、連絡先を伝える方法でアウトリーチを行ってきたが、それだけでは、少女たちも警戒したり、突然のことで驚くなどして、直接的な支援につながるケースは少なかった。そこで、より効果的な支援、つながるきっかけづくりを行うため、街中に停車させたバスを拠点にする。

そうすることで、「あそこにバスがあって、ご飯が食べられるよ」「良かったら少し寄って行かない？」などと案内することができ、少女たちに足を運んでもらいやすくし、団体の雰囲気や活動を知ってもらい、連絡先を伝え、顔の見える関係性になることで、困ったときに気軽に連絡してもらえる関係性をつくることができると考えている。

また、支援に繋がらない多くの少女たちが、自分の困りごとに気づいていなかったり、共に状況を整理する大人がそばにいなかったり、「相談する」ということが思いつかなかったり、「逃げるな、甘えるな、お前のせいだ」などと言われて育ってきたことなどから「相談」や「支援を利用する」という言葉や行為自体に抵抗感を持つ人が多い。そのため、アウトリーチでは「相談」を目的としない場づくりをすることで、そうした少女たちに出会い、利用してもらいやすい雰囲気作りを行う。

「問題解決」のみを目的としない「伴走支援」を行うことで、一時的な支援ではなく、その人の人生そのものに寄り添い、関係性構築や、日常的な暮らしへの伴走を通して自立を後押ししたいと考えている。

12 たった1人の寄り添いに、救われる

荒れていた高校時代、朝帰りする私に「おはよう。寒いわね。風邪をひかないようにね」と声を掛けてくれたおばあさんがいた。「こんな私に気付い

て声を掛けてくれる人がいたんだ」と、涙があふれた。おばあさんにとっては何気ない一言だったかもしれないが、私にはその一言があたたかく、心に残っている。自暴自棄になっている子どもたちの多くは、「大人に諦められた」と感じる経験から自信を失くしている。

私たちの活動の目的は、何かを解決することではなく、助けを求められない状況にある少女とつながり、伴走することそのものだ。虐待があり、親に強く支配されてきて、Colaboにきても「靴脱いでこっちにおいで」と言われるまで玄関に立ったまま動かなかった子が、関わり続ける中で「お腹すいたー」とソファに寝転ぶようになり、甘えたことを言い始めたりする、そうした1つひとつの変化を嬉しく感じている。子どもの居場所とは、「ホーム」と感じられる関係性、いつでも帰ってこれて、安心し、ほっと一息つける場所のことである。必要なのは特別な支援ではなく、当たり前の日常だと考えている。

(にとう・ゆめの 一般社団法人Colabo代表)